

研究課題	自立した三中生育成に向けた、「主体性」「自分で考える力」を引き出す教育活動の推進
副題	～ICTを「授業で使用」することから「社会で活用」することをめざした、子どもを主語にした実践の研究～
キーワード	「主体性」「活用」
学校/団体名	公立寝屋川市立第三中学校
所在地	〒572-0021 大阪府寝屋川市田井町
ホームページ	<a href="http://www2.city.neyagawa.osaka.jp/school/j/dai3/">http://www2.city.neyagawa.osaka.jp/school/j/dai3/</a>

## 1. 研究の背景

### (1) 本校の実態から

○2020年度の校内研を経て、2021年度、本校では「主体性」「自分で考える力」という重点目標を設定して、それぞれの教員で実践に取り組んできた。その中で多様な実践が見られたものの、取組の焦点化という点で課題が見られ、研究が推進しきれなかった。

そこで2022年度は“子どもを主語にする(本当の意味での子ども主体の)教育活動”という目的に焦点化して、授業等の学習活動や、特別活動等の諸活動を横断した活動の中で、各教科や各分掌・各学年を通して、“チーム三中”としての研究実践を行うという方向性を定めた。

○2021年度は修学旅行や校外学習といった行事でも、タブレット端末を生徒達に使わせることを推進してきた。その中のウォークラリー形式の行程において、タブレットがあるにも関わらず、その地図機能を満足に使うことが出来ない様子が多々見られた。その一方で、現行のタブレット使用に係るルールを守れない生徒も一定数見られるなど、学習以外場面で自分が遊ぶために端末を使うことは出来ても、必要に応じて活用することが出来ていないという課題を実感することがあったことから、研究推進の重要性・必要性を、全職員が身を持って感じている状況である。

### (2) 講師の指導助言から

2021年度、本校では研修講師として立命館小学校の正頭英和先生に来ていただき、ICT活用についての助言をいただいた。その中で、まず2021年度については、「とにかく使ってみる」ということで、ICT使用を推進してきた。そして、2022年度の展開として、「タブレットルールを生徒と一緒につくってみる等、生徒の主体的な活動を増やしてみる」というご示唆をいただき、(1)とは違う角度からも今回の研究推進の必要性を感じている。

## 2. 研究の目的

### (1) 本校の実態から

○2020年度末に行った『三中生の強みと弱みを共有するための校内研』では、教員が感じている生徒の課題として、「主体性に欠ける」「考えて動ける生徒が少ない」「社会的スキル不足等、全体として自立出来ていない」という実態が挙がっており、また一方で教員側の課題としても、「思考力を高めるような授業が出来ていない」「教師側が手を施し過ぎる」というものが挙がっている。

○各種調査から見える課題として、大阪府下全体で行っている授業アンケートの結果では、「意欲」に係る項目だけが他項目に比べて著しく低いことや、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の中では、「課題解決に向けて、自ら考え、自ら取り組んでいる」という項目の肯定的な回答結果が全国・市と比べて低いことが挙げられる。

(2) 寝屋川市の方針や今日的な教育課題から

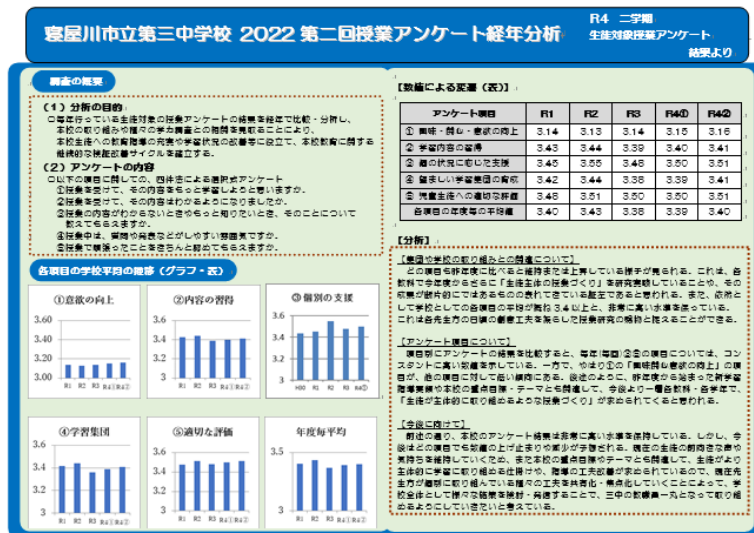
寝屋川市のめざす子ども像として、2020年度から、『考える力を身につけた、たくましく生き抜く子』が掲げられており、「自分で考える力」が必要であることに加え、また、今日的な教育課題として、PISA調査において、日本の子ども達は学習以外でICT端末を使う機会が多いが、学習に使う時間は少ないという傾向があることが知られている。さらには新型コロナウイルス感染症の感染拡大等、先の見えない社会情勢の中で、自らの課題を、自らが主体的に考えて解決していくことは、これからを生きる子ども達にとって、必要不可欠な資質・能力である。

⇒(1)・(2)の現状から、授業や諸活動を通して三中生の「主体性」や「自分で考える力」を引き出すための実践方法を工夫改善すること、またその際、活動の中でICT機器を積極的に活用して経験を積ませて、その振り返り活動を充実させること、以上2点を通して、研究主題の実現に迫りたい。

3. 研究の経過

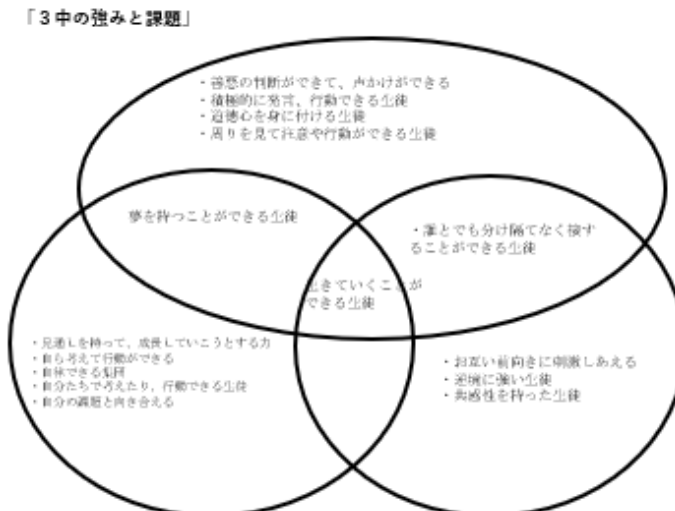
(1) 2020年度の取組

①種々のテストや調査結果を経年比較・同一集団の変遷比較する数値分析の開始



実際に使用しているアンケート結果の経年分析書式

②『三中生の強みと弱みを共有するための校内研』の実施



研修で出た意見の集約の例

(2) 2021年度の取組

○研修講師として立命館小学校の正頭英和先生に来ていただき、ICT活用について、まずは、「とにかく使ってみる」ということで、ICT(市から一人一台貸与されているタブレット端末)使用を推進してきた。

- 使用推進の具体例
- ①授業中の使用→アプリ「ロイロノート」
  - ②行事での使用→写真機能等
  - ③資料の配布

4. 今年度の代表的な実践

(1) 学習活動における具体的な活動内容

①生徒が進んで取り組める課題設定の工夫と具体的な目的意識を持てるような学習活動について、全教科横断的な研究の推進

→今年度は特に、6月に行った研究授業を契機に、全教科横断的な授業交流の充実を図った。

②①の目的意識に基づいた内省・省察をねらいとした振り返り活動を充実させる。

(右の写真は6月に行った研究授業の写真)



(2) 特別活動等の諸活動における具体的な活動内容

①タブレットルールを生徒と一緒に作る会議を2021年12月に立ち上げている(以下、ルール会議)ので、このルール会議を中心として、ルールの意義の検討から、どう運用・発展させていくかというPDCAサイクルを踏まえた取組を展開する

→今年度最初のタブレット会議での生徒会長の「ルールはみんな(三中生)を縛るものではなく、それを守ってたら正しい方向に進めるってみんなが理解したら、ルールが邪魔やとか破ろうと思わへんと思うから、そういう風に思えるようにルールを作っていかなあかん」という発言から、**三中におけるタブレット使用の正しい方向=ゴール(目標・目的)**を改めて考えるということになった。

→以降の会議にて、基本的に「学習目的」であること、その上で、“メリハリをつける”という方向性が定まってきたが、ルールの叩き台を交流している中で、クラブで使用していること等を考えると、目的が学習だけに縛られると、使用者である生徒自身のためにならない、という視点が加わり、三中としてのタブレット使用の目的が「学習目的」⇒『**自分自身の成長目的**』という方向に定まった。

→上記の流れでルールの原案を会議内で決めて、それを職員会議で発表し、承認を得た上で全校の学級委員会に下し、承認を得た。

→その上で、現在暫定版のルールを運用しているが、今後は現在出ている問題点を挙げていき、改善を行い、新たなルールを作成していく予定である。(右の写真は職員会議時の発表の様子)



② 共通ルール

**【基本ルール】**

- ・タブレットをカバンに入れて運ぶなどの破壊や故障の原因となる取組方法は避ける
- ・基本的にどの授業でもタブレット活用は目的である。学習目的、自己研鑽目的に於いてタブレットは活用すること
- ・授業前後や休憩などのタブレットの設定を無断で変更しない
- ※ただしiPadやタブレットを盗用した場合は**学習目的の取組**や他者多様性など特別な事情があり認定教員を呼び出す場合は担任の先生に認定教員の許可を得てから変更すること。
- ・カメラで誰か自分以外を撮影する場合は、撮影する相手の許可を取った上で撮影すること
- ・相手の許可なく撮影の無断に撮らざる者の人のタブレットは原則没収とする

**【学校での活用】**

**正しい使い方**

- ・授業ノートの代用
- ・授業収録（学習目的）
- ・プロジェクタやプレゼンテーションの資料や授業ノートを印刷することを目的とした印刷
- ・保護者関係カードの送信

**誤った使い方**

- ・授業と関係のないサイト、アプリを開く（YouTube等）
- ・授業で使ったサイトやアプリなどを別の授業で指定された時間以外に使うことも含む
- ※この場合「指定された時間以外」は授業で使えない授業も含むこととする。
- ・その他学習目的以外の使用

**【学校以外の場所での活用】**

**正しい使い方**

- ・課題の調べ
- ・Zoomなどのオンライン授業での使用（遠距離教育）
- ・スタディサプリ等でのインターネット学習
- ・部活の練習や練習する等自己研鑽も自然とした使用
- ・校外学習での有効活用

**誤った使い方**

- ・YouTube等サイト、その他アプリの学習目的、自己研鑽目的以外の使用
- 【休み時間での活用】
- ・基本的にYouTube等サイトやアプリなどを学習目的、自己研鑽目的以外にも使用しては**ない**こととする。

**【外見音が発生したり故障した場合】**

問題が発生した場合は、なるべく早く先生に伝えること。もし原因で問題が発生し、すぐに直えられない場合は、次の登校前にすでに先生に伝えること。

**このルールへの注意事項**

- ・表記に関して → 配布向けの表記ではない。
- ・このルールは生徒間でのルールであり、先生から罰則や許可がある場合は、このルールに定められていないこととする。

**このルールの特徴**

- ・ルール第一に実践にあたってのテーマ「メリハリをつけてタブレットを使おう！」
- ・ルールでの正しい使い方と誤った使い方の違い、基準（一面）
- ・自己研鑽目的であるか否か

＊生徒が作成したタブレットルール

- ②校外学習・修学旅行や、校内でのレクリエーションでもタブレット使用を積極的に推進して、“遊び（楽しいこと）”と“学び(生かせること)”を結びつける取組を通して、タブレットを必要な時に必要な方法で活用できる素地をつくる
  - ③②の取組の際に、自省・省察をねらいとした振り返り活動を充実させることで、経験によって得られた（深まった）価値という意味での“経験値”、経験によって学んだ生きた知見である“経験知”を、生徒が資質・能力として蓄えることができるようにする
- 全学年で実際の体験活動とタブレット使用を有機的に連動させ、成功体験・失敗体験を積み、それを適切に振り返り、教師からしっかりと価値付けることにより、昨年度見られたような“必要な時に使えない”というような事例は激減してきている。

(3) 上記を横断した具体的な活動内容

- ①生徒がより正しく大切にタブレットを使えるようにするため、正しい使い方の啓蒙活動を生徒自身が行うことで、ICT 機器を社会の中で活用する基盤をつくる
- ※(3)①は上記のルール会議で出た意見である
- ②自分たちで考えた目的を基に、生徒が主体的に企画する行事や取組を設定することで、自分たちで楽しむために自分たちで計画・実践するという経験を積ませる

→今回の取組で実際に生徒が企画した行事は

「3年生を送る会」内の『全校合唱』であった。新型コロナウイルスの影響で制限が多く、中々関わりを持てなかった中で、全校で一つのものを作り上げたいという声があり、卒業生・在校生ともに多かったため、実施に至った。在校生・卒業生ともに充実した行事に出来たという満足感・達成感があり、生徒主体で行事を考えていくということ、学校行事の在り方を見つめ直す大きなきっかけとなった。(右がその写真である。)



→また、生徒とともに考える研究助成金の使い道(生徒活動費)に関しては、「プリンタカセット増設費」「プリンタナー購入費」となった。これは、行事の振り返り活動を行う際に生徒が作成した成果物

(ポートフォリオ等)を印刷する際に、生徒が使用したいカセット機能がプリンタに備わっていなかったこと、そしてその成果物のほとんどがカラーであるため、それを継続的に尚且つ全校生徒が使えるようにするため、このような使用用途を生徒会で立案・承認を経て予算を執行することとなった。

#### (4) 校内研修会・研究会の実施

今年度、テーマに即した形で種々の校内研修会・校内研究会を行ってきたが、中でも本研究の大きな起爆剤となったのは、元千代田区立麴町中学校校長・現横浜創英中学高校の工藤校長先生による研修会である。

この研修会の中で特に本校教職員の中で刺激になったのは、「手段と目的を同一視しない」ということである。この研修会を契機として、学校教育の中で、まるで手段が目的であるかのように実施されてきた種々の取組、“当たり前”を教職員自らが主体的に見直すきっかけとなり、後述の様々な展開の興りにつながったと考える。

### 5. 研究の成果

#### (1) 成果目標による検証

- ① 定量的指標として、年二回実施の授業アンケートの「興味・関心・意欲の向上」に係る項目の回答結果の校内平均値の上昇〔現状値「3.14」⇒12月の数値「3.20」〕  
→12月の数値は「3.16」と、目標である「3.20」は下回っているが、昨年度・今年度と同アンケートを行った同一集団(現2・3年生)に限定すると、「0.4ポイント」の増加が見られた。
- ② 定量的指標として、学校独自で実施している三中アンケートにおける「課題解決に向け、自ら考え自ら主体的に取り組んでいる」の項目における肯定的回答率の上昇〔昨年度の数値「61%」⇒今年度の数値「80%」〕  
→今年度の実際の数値は「82%」であり、上記の同一集団(現2・3年生)に限定すると、「5.7%」の増加が見られた。
- ③ 定性的指標として、各教科や特別活動で行う振り返り活動の内容のレベルアップ(ねらいに迫る記述や、自己の成長を実感する記述の割合の上昇)  
→振り返り活動の内容のレベルアップを目指した結果、ねらいである振り返りの記述内容の向上はもちろんのこと、そもそも振り返り活動に取り組んでいなかった教科で取組が始まったり、分掌部からの提案で新たな取組が興るなどの様子が見られた。

#### (2) 成果目標以外の検証

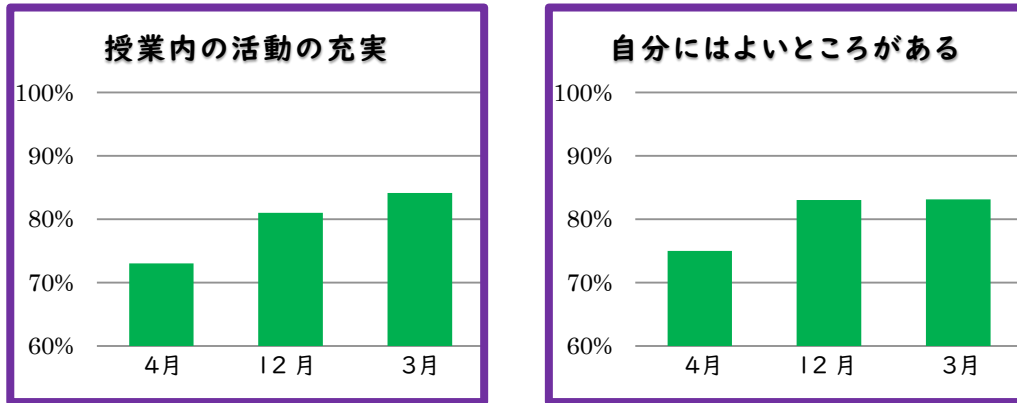
- ① こちらが企図していなかった展開が興ったこと  
→具体的には、(1)③に示した部分や、テーマに沿った分掌部からの新たな取組として、研究部からの授業交流週間と校内研究会を結び付ける提案や、生徒指導部からポジティブ行動支援に関する取組が提案された。他にも様々な部分で、教員自身が自分たちで考え、主体的に重点目標に迫る姿勢を引き出すことができた。



授業交流週間と結び付けられた校内研究会兼来年度の方向性を検討する会議の様子

②指標として取り扱った数値以外にも顕著な上昇が見られたこと

→具体的には、三中アンケートにおける「授業内の活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」という授業内の活動の充実に係る項目が「8%」、「自分にはよいところがある」という項目が「11%」上昇している。このように、種々の取組によって、本校生徒の主体性につながる部分が徐々にではあるが涵養されている様子が伺える。(推移は下のグラフ参照)



## 6. 今後の課題・展望

- (1)本計画の中心に据えていた「タブレットルール会議」をより充実させていき、より本校生徒全員が当事者となって考えられる機会を持つこと。
- (2)今回の助成事業を通して興った種々の取組を継続・発展させていくこと。  
特にその成果を生徒自身が実感できるように実践を工夫していくことを通して、「生徒が自分自身の成長を自分で実感できる」ことを校内全ての教育活動でめざす。
- (3)(1)・(2)を通して、学校のルール(校則)や在り方を生徒たちと見直し、生徒たちが当事者となって再構築していく取組としての『ルールメイキング』につなげていくこと。
- (4)校内授業研究会にて定まった来年度のテーマである、『三中生の「主体性」涵養のために、自分で考え・判断し・決定して・判断する場面を各種教育活動の中で創出する』という方向性を、各教科および特別活動の中で実践研究していくこと。

## 7. おわりに

助成を受けて校内の研究を推進してきたが、最も顕著に感じたのは、研究主題そのものの深まりと併せてその波及効果の大きさである。上記「5. (2)②」に示した通り、今回成果目標として設定していた指標以外の部分についても顕著な上昇が見られたのは、同「5. (2)①」に示している、こちらが企図していなかった展開の興りに依るところが大きい。

この展開の興りは、教職員の目的意識の共有が非常に大きいと思われる。先述の工藤先生のお話にもあったように、「従来通り」を見直し、最重要課題である、“三中生の主体性を引き出すにはどうすればよいか”をそれぞれの場面で、それぞれの立場で考えることができたからこそ、本研究の裾野が広がってきた部分は間違いなくあると思われる。

だからこそ、次年度以降は上記「6. 」のように、本校生徒自身が当事者意識を持って、考え行動できるようにしていくことが求められる。今年度の裾野の広がりを一過性のものにせず、よりクリティカルなものにしていくために、教職員・生徒・保護者地域と一丸となった“チーム三中”としてのゴールに向けての取組を、歩みを止めずに推進していきたいと思う。